



1999年10月20日

発行/(社)三原青年会議所
編集/広報委員会
三原市皆実4丁目8番1号
(三原商工会議所内)
TEL(0848)63-3515
FAX(0848)62-1141
インターネットアドレス
<http://www.tako.ne.jp/~mjc/>
メールアドレス mjc@tako.ne.jp

'99三原JCスローガン

壁を破れ!

できないのではなく、
やらないだけ。
やる気があれば
いつか必ずできる!

今月号の記事

- 1面 教育を変える
- 2面 今、広島県の教育は
- 3面 今、三原の子ども達は
- 4面 特集・ちょっと一言/ペットボトル/めざせ広域交流/竹とんぼ大会/9月例会/新入会員募集 他

みたか
きいたか



秋と言えばスポーツの秋、我が家でも毎日曜日に小学校・幼稚園と運動会がつづいた。しかし、毎年思うが、私たちの子どもの頃とは全く様変わりしてしまっている。徒競走もなければ、赤・白に分かれての勝敗も無い。もっと驚いた事は、六年生の組立体操のとき、男女が一緒に、ピラミッドにおいては、女の子が一番下で男の子が上というチームもあったことである。いくら平等と言っても少しやりすぎではないのか。最後の校長先生の言葉で「本日の『遊技』大変お疲れさまでした。」と言う。『遊技』には、またまた驚いた。まるで運動会はスポーツではないようである。幼稚園の方が見ていると楽しく、面白い。徒競走で一番になった時の本当にうれしそうな顔を見ると、こっちまでうれしくなる思いである。何でも同じでないといけない。勝敗を決めるのは良くないというも分かるが、たとえば、勉強が苦手でもスポーツの得意な子ども、逆に、スポーツは得意でないが音楽の上手な子ども等、それぞれに優れている子がいるはずである。教育とはどんな子にでもその子をもって価値を認めてゆくということではないだろうか。今の子どもたちは『キレル』『ムカつく』という世代といわれているが、これは今の時代に心の充実感が無い現れの一つであろう。母親が保険金めあてに自分の子を殺す事件、白昼での無差別殺人事件など信じられないことがひんぱんに起っている。何か世の中が狂っている。変わらなければいけないことに気付くのは本当は私たち大人ではないだろうか。

教育 を 変える。



写真は教育についてのイメージであり、記事の内容とは関係ありません

2年前に神戸でおこったいわゆる「酒鬼薔薇聖斗事件」や「バタフライナイフ教師刺殺事件」は、いまだ記憶に新しい。その残忍さや冷酷さはもちろん、こうした事件を起こした子どもが、一見したところ「ふつう」の生徒であったことに大人社会はみな驚き衝撃を受け、子を持つ親すべてが我が子に対し「この子だけはまさか...」と不安を募らせたはずである。

いま三原市内でも、高校生を中心とした様々な少年

事件が多発している。交番襲撃、暴走行為、自動販売機の放火など、その凶悪さはまるで映画の中の出来事のようにも感じられ、大人にとってはとても信じがたいことであろう。しかも警察署からの話だと少年の逮捕者や補導数もここ数年で急増しており、高校生から中学生、小学生へと裾野が広がりつつあるとのことである。子ども達を取りまく様々な問題は、もはや対岸の火事では済まされない。

まず必要なのは私達の意識改革

戦後の驚異的な経済発展を支えた要因のひとつとして、凹凸のない画一的な人物を大量に世に送り出すことで、生産性を高水準に保てたことが上げられます。しかしながら代償として個人のアイデンティティは失われてしまい、その結果様々な問題が表面化していると言われていいます。

子ども達は無限の可能性を持っています。国語の好きな子、体育の得意な子、仲間をまとめるのが得意な子、絵の好きな子...このような可能性は偏差値という一本の物差しでは評価できません。「そんなことわかってる。でも現在の受験体制の下では成績順位がすべてである以上、偏差値で判断するしかない。そう反論する方は多いでしょう。しかし子ども達の視線から見ると、自分の価値を正当に評価してくれるほど嬉しいことはありません。

学校の成績と言ったひとつの物差しで評価するのではなく、人間としての価値と言う多様で複数の物差しで評価し、接していくことが重要と言えます。すなわち教育改革とは、文部省や学校だけが行うのではなく、私達自身の意識改革こそまず必要なのです。

答えのない教育

では意識改革を、具体的にはどのようにしていけば良いのでしょうか。今まで私達は教育に、知識のみを求めてきました。今後は教えるだけの教育ではなく、答えのない教育も必要でしょう。例えば、課外授業でごみの最終処分場に行った時、教師がゴミの山を示して「一日何トンのゴミが入ってくる」「この処分場は何年後にいっぱいになる」と言った数量的な話をし、「だからみんなでゴミを減らすようにしよう」という結論まで教えてしまう。これでは子ども達はひとつの知識を得たに過ぎず、自分で考え、自分で行動する人間には成長できません。

知識偏重ではなく子ども達の能力を活かす教育では、ゴミの山を見せ、帰ってから子ども達がどう感じたのか、そしてどうすれば良いのかを話し合うのです。ある子どもはペットボトルがたくさん捨ててあることに気づき、家庭にあるペットボトルを捨てずにリサイクルすると発表し、ある子どもは残飯の腐った匂いをかいで、給食はもちろろん食事は残さず食べるようにすると発表します。子ども達はひとつの経験から様々なことを感じ取り、自ら行動を起こす能力を持っています。大切なのは、子ども達が感じたことを、親や教師や地域と一緒に活かして行くことなのです。

街そのものを「まなびや」に

「衣食足りて礼節忘れる」このような状況は、経済発展、物質的な豊かさを第一にあげた戦後教育が極端な形で行き過ぎた結果だと言われていいます。答えのない教育の一番の目的は、社会における道徳観や倫理観、規則性を子ども達自ら体験することにあります。答えのない教育を進めるには、子ども達を取り巻く社会、親、教師、地域が、固定した一本の物差しだけで子ども達を評価するのではなく、子ども達の能力を信じ、子ども達が感じたことを共感していくことが大切です。

現在、専門職を活かした民間人による授業、子ども達の職場体験学習、子ども市議会、親子ボランティア等、答えのない教育に対して様々な提案があります。今後はこれらの提案をひとつ一つ実践していく必要があります。そのためには地域と学校があらゆる分野で相互交流を行い、学校・家庭・地域が三位一体となった「共育」の実現をしなければなりません。何も難しいことではなく、私達自身が気づき、できることから始めれば良いのです。それは学校だけとか家庭だけではなく、街そのものを「まなびや」へと変えていくスタートラインと言えるでしょう。

本紙『やっさもっさ』は、1月から11月まで毎月1回3万2千部発行し、新聞折り込みを中心に配布しております。何卒ご愛読ください。

やっさもっさは資源保護のため再生紙を利用しています。